昭和三十一年に於ける国語学界の展望

国語問題

辻村敏樹

ことしも例によって学界の展望がなされることになり、筆者は国語問題を分担させられた。ところが、この問題は広い意味に解するのと狭い意味にとるのとでは随分その扱い方が変ってくるように思われる。

しかし、さいわい今度から「国語教育」「言語生活」の二項目が別に立てられるはずなので、そういった方面のことは当然そちらに譲って、狭い意味でのもの、つまり世にいわゆる国語国字問題といった面に焦点を絞ることにする。

ただし、そうは言っても、こういった分類自体決して絶対的なものではなく、まして、それぞれの分野はやはり相互に密接な関係を持っているものであるし、見方によっては、どの分野でも扱い得るものも多いから、他の項目で取りあげられたものと重複する場合も出てくるかも知れず、また逆に数ある論説のすべてにはふれ切れず、更に不用意の見落しなども免れないことと思うが、その点切にお許しを願う次第である。

一

国語国字の問題と言う時、世間の人がまず第一に頭に思いうかべるのは、少くとも現代に関する限り、かなづかい及び漢字使用の問題であろうと思われる。それほど、この問題はわたしたちの生活に密着しているということができるのである。しかも、本年（昭和三十一年）は、現代かなづかい及び当用漢字が制定公布されてから丁度十周年にあたる年であった。筆者はこのことから当然かなりにぎやかな催しなどがあるものと期待していた。しかし、実際には公布当日（十一月十六日）の前後に諸新聞が関係記事や論説（「新かなを使って十年」と題する、山本健吉（一一・一五～一六）原富男（一一・一八～一九）両氏の論、源氏鶏太氏の「便利な現代かなづかい」（一一・七）〔以上何れも東京新聞〕等）をのせたこと、カナモジカイを主体とした記念講演会が東西で行われたこと（十一月十七日、東京朝日新聞社講堂、国語教育学会共催。十一月二十六日、大阪朝日新聞社講堂、大阪国語教育研究会共催）くらいが目立ったところで、政府の側では何ら行事らしい行事も行われなかった。

これは、それほど当用漢字や現代かなづかいが一般に行きわたってしまって、今さら仰々しく問題にするに当らなかったからだとも考えられるが、一方には国民のあきらめや、なるべくそっとしておこうといった政府の考えが原因していたようにも思われる。

とにかく、右のような次第で記念日を中心に云々というような

ことは余り見られなかったが、しかし、一年間を通じてみるなら注目に価する事柄は決して少くはなかったのである。

二

その第一にあげられる事は、何といっても金田一京助・福田恒存両氏のかなづかい論争であろう。

この論義は周知のように、前年（三十年）十月の雑誌「知性」に、福田氏が「国語改良論に再考をうながす」という題で、現代かなづかい・当用漢字に反対の意見を述べたところからはじまる。氏の論の鉾先は主として金田一京助・桑原武夫の両氏に向けられたのであったが、同じ「知性」の十二月号で金田一氏が「かなづかい問題について」と題して反論を試みたのに対し、桑原氏は「私は答えない」といって論戦に応じることを拒否した。そこでいきおい論争は金田一・福田両氏の間に展開されることとなり、結局本年二月に福田氏の「再び国語改良論についての私の意見」（知性）、五月に金田一氏の「福田恒存氏のかなづかい論を笑う」（中央公論）、七月及び八月に福田氏の「金田一老のかなづかい論を憐む」（知性）とやりとりが行われ、その間六月には高橋義孝氏の「国語改良論の『根本精神』をわらう」（中央公論）などもあって、（ただし、これに対する金田一氏の答え《高橋義孝氏へのお答え」中央公論七月号》は黙殺に近いものであった。）誠にはなばなしいものがあった。

これらはいずれも総合雑誌の上で論ぜられたため一層世人の目を引いたわけであったが、結局、言語観そのものに根本的相違のあるところへ持って来て、金田一氏は終始かなづかいを中心に論じたのに、福田氏は当用漢字をも含む国語表記の全般に及び言語文化論ともいうべきものを打ち出した点、更に金田一氏が、現代かなづかいは現代語音に基いたものであって表音式ということはどこにも言っていないというのに対し、福田氏はそうはいっても所詮現代かなづかいは表音性を指向しているではないかと述べている点など、最初から大きなくいちがいがあったため結局水掛論に終ることとなった。

しかし、この論争がかなづかいに対する世人の関心を呼びおこした功は買われてよく、現に、言語道具説を非とする臼井吉見氏の意見（読売・五・一六）、「根本精神」の解釈のくいちがいを指摘した大久保忠利氏の見解（東京タイムズ・六・一五）、読者の立場を重んぜよという石黒修氏の発言（産経時事・四・二〇）等をはじめ諸新聞に多くの人の意見がのべられ、国学院大学新聞は論争そのものの批判ではないが、かなづかいについての特集号（五・二五）を出して、当の金田一・福田両氏、更に高橋義孝氏をはじめ荒正人、今泉忠義、沢潟久孝、海音寺潮五郎、さねとう・けいしゅう、松坂忠則、山本健吉氏等の賛否両論をのせたが、中に今泉・海音寺両氏の反対論にはきびしいものがあって注目させた。（筆者自身も時事通信に一文を寄せたが、西日本・山陽等の各紙にのせられたものは、ことさらに論争をあおるように標題や語句を改めたものであった。この一事から推しても論争をあのようにもつれさせた責任の一半はジャーナリストのセンセイショナルな扱い方にあったように思われる。）

なお、国大新聞は六月廿五日号でもかなづかい問題を扱い正書

法による解決を唱える岩淵悦太郎氏や、現状押し切りを主張する鶴見俊輔氏の論説をのせた。

また雑誌では、さねとう・けいしゅう氏が言語生活（八月号）に「かなづかい論争の問題点」と題する文を寄せ、金田一氏はかなづかい問題について述べているのに福田氏が国語改良ということを言うのは文字と言語を混乱した用い方であるとし、進歩的な立場から金田一氏を支持したのが目立った。

その他には、かな文字本来の表音性ということを土台に考えるべきだとする江湖山恒明氏の論（「仮名づかい論義に寄せて」《国文・六号》）もあり、石坂正蔵氏の「国字問題をこう考える」（いずみ・十七号）は直接に論争にはふれなかったが、国語問題には方向・方法・形の三つが満足されなければならないと説いて示唆に富むものであった。

また、知性十月号では論争についてのアンケートの中から主だったものを「かなづかい論争に寄せられた読者の声」と題して発表したが、当用漢字をも含んで新かな派三十一名、旧かな派五名、中立三名となっていて、現代かなづかい支持派が多く、福田氏の論に一々鋭く反駁した武部良明氏をはじめ総体的に福田氏に対する風当りが強かった。

更に単行本では、さねとう・けいしゅう氏の「日本語の純潔のために」と、太田行蔵氏の「日本語を愛する人に」とに論争が大きくとりあげられ、さねとう氏は、「歴史的かなずかいか、現代かなずかいか」という標題のもとに、論争は日本語をよくするためにこそ行われなければならないと前おきして、前記言語生活掲載の論文の趣旨を更にのべ、大衆の従いやすい表記法こそ大切だとして金田一氏の論を支持し更に、連濁や連呼音なども「じ」「ず」に統一し、助詞「は」「へ」等も「わ」「え」とするなど現代かなづかいより一歩進めた案を提唱した。これに対して太田氏は、文字というものは国民の生活に根ざしたものであるのに、現代かなづかいはその意志を無視してきめられたものだから、現に行われているという既成事実によって押し通すのでなく、もう一回国民の総意に問うべきであるとし、「は」や「へ」は軽く「わ」や「え」は重いし、「を」と「お」の間には明瞭に音の区別があるのにそれを同一視するようなこと認められない、といって、逆に福田氏を支持する論を展開している。

以上のように論争は論争を生んでこのかなづかい論義は国語の問題としては近来まれに見る活気を呼んだのであるが、最後に私見を一言そえることを許されるならば、施行の方法にたとえ問題はあったにせよ、やはり時代の推移に伴ってある程度の表記法の改訂はなされるべきであり、まして、今さらこれを元に戻すなどはいたずらに混乱をまねくものであるから首肯できない。ただ問題のある点については更に一般に問うて正して行くべきであると思われるのである。（小論「かなづかいの問題」《出版ニュース・六月下旬号》）

三

ところで、現代かなづかいや当用漢字については右の論争とは別個にもかなり多くの発言をみることができるのであるが、文学者の意見をまとめたものとしては日本文芸家協会のアンケート（言語生活・七月号）をあげることができる。これは五七七名中

一七三名という回答率であったこと、その中には文学者とは言いかねるような人も含まれている点などに問題が残るが、それでも大体の傾向を知ることはできる。そして、それによれば、現代かなづかいについては批判はありながらも総体的には支持者が多いのに対し、当用漢字には検討の余地ありとして従っていない人が多いのが注目される。これは結局かなづかいの方は原則で大体おせるのに対し、当用漢字の方はそれを一々覚えなければならないというわずらわしさのあることに起因するところが多いものと思われる。

次に、かなづかいのみについて言えば、助詞「は」「を」「へ」は「わ」「お」「え」に、連濁連呼音は「じ」「ず」に、「オ列長母音」は「う」に統一すべきだというような見解が多かった。例えば、大阪国語教育研究会が三月三十日に文部省に提出した建議「現代かなづかい改正案」矢野文博氏の「現代かなずかい私案」(語文研究四・五号)、佐竹正雄氏の「現代かなずかいをもっと合理的に」(大阪毎日・三・一四)等をはじめ新聞の投書にもこの種の意見が多く見られた。

中でも井之口有一氏の「現代かなづかいにおけるオ列長音表記の問題について」(人文・七号)は、表記法の歴史的考察、小中学生を対象とした実態調査等に基いた労作であるが、結論としては現代かなづかいで「お」になっているものも「う」にかえてはという補正案が出されている。

とにかく、右のような諸点は現代かなづかいで常に問題とされかつ議論のわかれるところであった。然るに従来はこれについての理論的説明が不十分であったのである。

そこで国語審議会はこの問題を討議した結果、七月五日、「報告」の形で、「正書法について」と題する見解を発表し、現代かなづかいの問題は当用漢字と共に正書法(表記法)というわくの中で考えるのが至当であり、それには語意識ないし語構造ということを考えて、そこから説明して行くべきであるとした。そして前述のような問題点につき説明を与え、特に連濁については具体的に実例を示して一つの解決策とした。

これは従来不分明であった点について当事者の見解指針を明らかにしたもので、適当な措置であったと言えよう。

なお、「言語生活」二月号はこの正書法についての特集号であり、浜田敦氏の「正書法としての語表記における漢字と仮名の問題」、松村明氏の「正書法としての送りがな」、岩淵悦太郎氏の「正書法としての仮名遣」等をのせた。

浜田氏のは漢字かな交り文をいわゆる正書法の立場から規制することは結局無理だとの趣旨であり、岩淵・松村両氏のはともに「かなづかい」や「送りがな」をそれだけ切りはなして考えず、正書法の立場から他の問題と関連させて綜合的に考えなければならないといった趣旨のものであった。

なお、同誌には大久保忠利氏の英米の正書法の歴史を紹介したものもあって参考になる。

次に漢字について言うと、国語審議会は「正書法」の報告と同時に「同音の漢字による書きかえ」についての案を発表した。これは「愛慾」を「愛欲」に、「闇」を「暗」に、「安佚」を「安逸」

にするというようなもので、当用漢字表にない漢字を含む漢語を処理する方法の一つとして考えられたものであり、その数三百一語、「広く参考として用いられること」が希望されている。

ただし、これは音読語の場合のみに限られているが、これより先に新聞用語懇談会は独自の立場から「統一用語集」を出し訓読の場合をも含む「同一音訓異字同義語」の統一をはかって、新聞用語としての規準を示した。

また当用漢字には新字体が含まれているため、当然その部首について整理がなされなければならないが、全国の活字業者及び新聞協会では文選作業の必要上からこれを検討し、業者大会では一八五〇字の当用漢字を新部首百二十七部に整理し、新聞協会（工務委員会）でも七十字の所属を決定した。どちらも従来通り康熙字典を重んじているが、前者はかなり思いきって改訂し、新しく十一部首をも設けて前記のように決定した。（康熙字典では百九十二部首）

ただし、これは右に述べたように文選作業のためという見地からのものであって教育的な問題としては別に考慮される必要があろう。

以上現代かなづかい及び当用漢字の問題に焦点を絞って来たが、本年のものをも含めて、この問題に関する過去十年間の主だった論説を要領よく紹介批評したものとして永野賢氏の「『現代かなづかい』『当用漢字』についての批判と論争」（言語生活十二月号）がある。

それから最後に一言ふれておきたいのは字埋め懸賞クイズのことである。これは五月二十七日に読売新聞に掲載された推理作文を皮切りとして、それ以後諸種の新聞雑誌に忽ちひろがって一大流行をきたしたものであるが、いずれも当用漢字・同音訓表及び現代かなづかいに従うことを規定したため、解説書なども次々に現れるといった工合でその知識の普及に大いに役立った。これは結局、民衆が一片の法令などよりは自己の意志に基いて動くことを端的に示したものであり、国語政策の上にも一つの示唆を与えるものであったと言えよう。あえて一言添える所以でもある。

四

現代かなづかい、当用漢字の問題はこのくらいにして、以下思いつくままに関係事項、論説などにふれて行こう。

まず漢字については馬淵和夫氏の「文字観革命と漢字制限の一方向」（国語・四巻三号）をあげたい。この論は従来の漢字制限の方法を批判し、漢字使用の歴史をふりかえった上、結論として漢字音読専用（従って、国語はかな、漢語は漢字、外来語は片カナで書くことになる。）を唱えたもので示唆に富むものであった。

しかし、氏はローマ字化への方向は否定するのであるが、中国においては漢字の簡略化、異体字の整理を行い、更に漢語表音方式の草案を発表してローマ字化への道を踏切った。そのことが日本にも伝えられ、倉石武四郎氏など多くの人からこれについての発言があったが、ジェームス・A・ミッチェナー氏の「日本の国字問題に寄す」（朝日六・五）が、文盲の多い中国に比べ、教育の行きわたっている日本の方がかえって文字改革が困難だと指摘したのは考えさせた。

なお、ローマ字論についての一々は省略するが、岩村清一氏はその著「第二次産業革命と国語問題」において、事務能率向上のためのローマ字採用をといて独自な見解を示した。

また、小学校におけるローマ字教育、ひらがな先習は、それぞれ国語審議会（四月）・教育課程審議会（五月）で再確認されたが、これは漢字の学年配当の問題などとともに「国語教育」の項でふれられることであろう。

次に表記法の問題としては、縦書き・横書き・数字の三ケタ切り・四ケタ切りの問題などがあるが、前者については「仮名文字の縦書きと横書きの読みについての一考察」と題する五十嵐斉一氏の論文（信州大学教育学部研究論集）が、中学生を対象に平がな・片カナ両方について実験したユニークなものであったが、結局縦書きと横書きとによる差異は殆どなく、有意味文字系列においてのみ平がなが片カナより早いという結果となっている。ただし、この実験については氏も言う通りなお検討を要するであろう。

また数字の切り方については、前記さねとう・けいしゅう氏の「日本語の純潔」には四ケタ切りが主張されているが、遠山啓氏も小学生には四ケタ切りがよい旨を述べて注目された。（朝日・四・二五）

それから一つの話題となったものに履歴書のペン字横書き運動がある。これは就職の際の履歴書を従来慣習となっていた毛筆縦書きからペン字左横書きに変えようとするもので、東大法学部自治会の緑会が音頭をとり「履歴書ペン字横書き運動促進委員会」をつくって全国の大学に呼びかけ、経営者団体や一流民間会社に請願したものであった。その結果は、たとえば九月二十日の朝日新聞によれば、アンケートを求めたものの五〇〇社中回答二三二社、その中、積極的にペン字横書きに統一するというもの五三、受理するが強制しないというもの一二四、受理しないが大勢に応じるというもの二七で、あくまで毛筆にというのは僅か一五（六パーセント）にすぎなかったという。

もっとも、これに対する世評はやはりまちまちのようで、ペン字でも人格はわかるとするもの（産経・八・五）もあればその反対に性格がつかめないとするもの（中部日本・八・七）もあった。

最後に話しことばについては、国語審議会が、前記正書法や同音漢字の書きかえについての報告などと共に七月五日に、建議している。それは、話しことばに対する社会的関心を高め、これを改善するために、研究や教育についても工夫されることを望んだものである。そして同時に発表された第二部会長報告は「いつ、どこで、だれが、だれと話し合ってもよいことば」ということを目標に学校教育は進められなければならないが、それは特に話し合いの教育において必要だということ、また話しことばと密接な関係にある書きことばは当然きいてわかりやすいという点から考慮されなければならないことを述べ、更に放送や演劇・映画のことばが、よいことばの模範となることを望み、最後に敬語については適切簡素であることを要望している。（言語生活九月号）

なお、話しことばに関連したものとしては、その特性を書きこ

とばの文体の上にも生かして行くべきだとする岩淵悦太郎氏の第二次言文一致の論（国語学会東京講演会、早大新聞・二・五）や類音類義語の実態を示してそれによる誤解の予防策を説いた武部良明氏の「類音類義語について」（国文学研究第十三輯）、更に西尾実氏の「国語の問題点」（日本及日本人・五月号）、「話しことばを改善しよう」（朝日・七・二六）などがあげられるが、すでに「言語生活」の項で扱われるべき分野に足をふみ入れかけたようなのでこの辺で筆をおくことにする。

以上甚だ要領を得ず、また取捨選択などにも適切をかくものがあったことと思うが、これ偏に筆者の不明の致すところで、はずかしく思うのみである。

なお、本稿をなすにあたって快く資料披見の便をおあたえ下さった国語研究所の方々に心から感謝の意を表したい。

（一九五・七・七三）

——早稲田大学講師——

人文研究（第8巻第4号）　三・四月
大阪市立大学文学会

国文学（第17号）　三・四月
関西大学国文学会

国語研究（第6号）　三・四月
国学院大学国語研究会

兵庫方言（第5号）　三・四月
兵庫方言学会

国語国文研究（第10号）　三・四月
北海道大学国文学会

国語国文（第26巻第4号）　三・四月
京都大学国文学会

言語生活（第68号）　三・五月
国立国語研究所

立命館文学（第114号）　三・五月
立命館大学人文科学研究所

神奈川県未刊方言資料(一)　三・五月
ひでばち民俗談話会

カナノヒカリ（第419号）　三・五月
カナモジカイ

エスペラント（第38巻第5号）　三・五月
日本エスペラント学会

ローマ字世界（第504号）　三・五月
日本ローマ字会

計量国語学（第1号）　三・五月
計量国語学会

国語国文（第26巻第5号）　三・五月
京都大学国文学会

国学院雑誌（第58巻第1号）　三・五月
国学院大学

人文研究（第8巻第5号）　三・六月
大阪市立大学文学会

言語生活（第69号）　三・六月
国立国語研究所

エスペラント（第38巻第6号）　三・六月
日本エスペラント学会

カナノヒカリ（第420号）　三・六月
カナモジカイ

ローマ字世界（第505号）　三・六月
日本ローマ字会

立命館文学（第145号）　三・六月
立命館大学人文科学研究所

女子大国文（第6号）　三・六月
京都女子大学国文学会

国学院雑誌（第58巻第2号）　三・六月
国学院大学

（以下九一頁へ続く）

（七六頁より）